

が待っている。破裂するのを待っている。大雨で女鳥羽川が決壊して町が浸水した。中町と餌差町と博労町が火事で焼けて、中町通りのなまこ壁が出来た。なまこかべ。そう呟く唇は破裂するけれども町の人たちはずっと待っている。ということはつまり何処にも行かないで、電車は一時間に一本しかないし誰も乗らない。この町で生きるのには車がマスト、一方通行ばかりで曲がり道も回り道もしなければいけない。そうして待っている。誰ももしく、を言わずに、破裂させずに待っている。壊されるはずだったけれども市民が守ったお陰で、町の真ん中には〇〇城が今もお建っている。〇〇。唇が待っている。壊さない、この町の人達は皆優しい。町のおっぱいである城に私がまだ行ったことがないと言っても、きっと誰も怒らない。もしも耳の遠いおじいさんの耳元で私が呟いても、だろうか？ 町が破裂する。あそこにはよく行くんですけどね。ミモザマンマクリニツク。

ミモザマンマクリニツクの隣の隣の通りの本屋には二階があって、そこで夜おじいさんがモグモグしているのが窓から見える。私はあれがおじいさんの居城なのだと知り、明日入って来る新刊をわざと耳の遠いおじいさんの本屋に行って買うのを決める。おじいさんはまたどうぞ！ と毎回大声で言うのも忘れず、私は町の皆と一緒に、田舎だから新刊が発売日から遅れて入るのを、破裂させずに、心から待っている。